

連載68

内海善雄の  
(ITU前事務総局長)

# やぶ睨み 「ネット社会」論

## 日本の国際評価を上げるには エボラ対策も大きなチャンスだった

人間はとも「考える輩」とは言えない。平気で他の生物を食らう本能的な「肉食動物」だと思っ。

セウォル号の船長は、その結末をちよつと考えるなら、いの一に船を脱出することはできなかったに違いない。考えればCO<sub>2</sub>の排出を減らさなければならぬことは自明の理だが、我がもの顔で温暖化ガスを撒き散らす。戦争ほどバカげた行為もない。人の行動は思考を欠く非合理的なものでいっばいだ。最近の顕著な例は、エボラ出血熱対策である。

### 当初から分かっていたこと

本年三月にギニアで患者が報告された時から、初期に封じ込めなければ瞬く間に人類を危機に陥れることは分かっていた。貧困で医療レベルが極めて低い西アフリカ諸国には、

封じ込める能力がないことも分かっていた。流行の状況は逐一世界中に報道され、WHO（世界保健機関）は、何度も警報を発した。しかし、国際社会は動かなかったのである。

執行力を持たないWHOも、加盟国が決定さえすれば、権限と予算が付与され、西アフリカ諸国でエボラ熱を封じ込める医療組織を創設することができた。国連本体にも同じような組織を創設することはできる。しかし、各国は動かなかった。

現地でエボラ熱と戦っていたのは、NGOの「国境なき医師団」だけであった。彼らの活動がかるうじて爆発的な蔓延を食い止めていたが、自分たちだけでは対処しきれないと悲痛な訴えを繰り返した。しかし、国際社会は動かなかった。

ところがテキサスやニューヨークに患者が現れて初めて米国民は恐怖に陥り、米大統領は米軍派遣を決めた。各国も支援を開始した。国連も国際支援を調整するチームを立ち上げた。やがてこれらの対策は功を奏し疫病は収まるだろう。

考えれば、人々の流動が激しいグローバル化の時代、エボラ熱は決して「対岸の火事」

ではなく、人類共通の敵である。だが一患者者発見から半年以上もたち、すでに死者が五千人を超えてからやっと各国は動き始めたのである。

ところで、孤軍奮闘していた「国境なき医師団」は、主として個人の寄付と自己の危険を顧みない献身的ボランティアの医療従事者に依存している。日本にも年間数十億円の寄付を資金にした支部がある。損得だけを考えれば、「国境なき医師団」の活動は存在しえない。人間には、利己的な感情だけではなく、博愛的な感情もあるのだ。

### ジャーナリズムの真骨頂

人間が利己的な感情だけで行動していたのでは、社会は成り立たない。利己的な欲求を抑え、理性的な行動を喚起し、また、他人を思う崇高な感情を涵養しなければならぬ。法律や倫理・道徳、そして教育や宗教は、そのために人類が考え出した知恵だろう。

近代社会になって新しく登場したジャーナリズムも、大衆の利己的な欲求を抑え、社会を正しい方向に導く絶大な力を持っている。道徳観や宗教的感情が希薄になった現代では、

この役割こそがジャーナリズムの真骨頂ではないだろうか。

残念ながら日本のジャーナリズムは、あまり自慢のできるものではないと思う。戦前は、国民の戦意を高揚し、大本営発表に迎合した戦後は一変し、民主主義を標榜して国民の良識を装った。しかし、慰安婦問題で露呈したような暴走や、やらせ番組などの俗悪商業化があった。最近では誤りを犯した朝日の一斉批判で、ジャーナリズムとしての使命を果たしていると自任しているかのようである。

さて、エボラ熱にはどのように対処したのだろうか？ 悲惨な状況は十分に報道されたが、このウイルスと戦っている「国境なき医師団」の活躍の様子はほとんど報道されなかった。帰国した日本人メンバーがどのような防護策をとったかと防護知識としては報道されても、国境なき医師団の解説や、ヒーローたちの詳



日本でも身近になって「大騒ぎ」(写真/時事)

細は報道されていない。九月、日本政府は遅ればせながら経済的な支援を表明したようであるが、その詳細な報道もなく、また、マスクミが募金活動を奨励するような動きもない。このように、基本的にはアフリカという別世界の事件であり、まさに対岸の火事を取り扱いであったと言える。ところが、汚染国からカナダ人が入国して、にわかに緊張感が走った。マスクミは一斉に波打ち際対策が十分かと訴えた。しかし、陰性であることが判明すると、再び対岸の火事の態度に戻った。ネット上では入国したカナダ人が、韓国と一緒にあって日本を非難する有名なジャーナリストであると、その素性や行動を批判するアングラ発言が目立った。

### 知恵を働かして世界のリーダーに

総括すれば日本のジャーナリズムは事象をフォローするだけで、人道的な見地からの主張も世界的な危機対策の必要性を啓蒙する気概もなく、なんともレベルが低い。

もし日本のジャーナリズムが、世界に率先してエボラ・ウイルス封じ込めのための啓蒙やキャンペーンを行っていたらどうだろうか？ 思いやり深い日本人は、必ずやそれに呼応していたと思う。そして、日本が世界に率先して募金活動や医療活動を行っていたならば、一流国とし



内海善雄(うつみ よしお)  
1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現な通総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング」協理。IEEE名誉会員。

て世界から尊敬されていたに違いない。たとえ、それがウイルスを現地で封じ込めて日本には輸出させないという自己防衛心や、また、日本の評判を上げようという姑息な底意があったとしてもである。米国が米軍を派遣することになって、初めて各国も従った。世界のリーダーとはそのようなものなのだと思う。日本も地球の一員として貢献しなければならぬならば、率先垂範してトップ・リーダーになるべきである。政府は十一月、APCEC首脳会議を前にして、一億ドルの追加援助を表明した。どう見ても批判を避けるためのタイミングである。半年前にこの十分の一の額でも実施していたならば、国民の税金は何十倍にも生かされていたはずだ。「ペン」は剣よりも強し。ジャーナリズムが積極的にこのようにことに貢献してこそ慰安婦問題の汚名も晴らすことができるのではないだろうか。ぜひ「考える輩」になってもらいたいものである。